

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 鈴木 岸子

論 文 題 目

女性家族介護者の「腰痛」と「首肩背中のこりと痛み」に関連する介護要因の分析

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 平井 眞理

名古屋大学准教授 湊田 英津子

名古屋大学教授 榊原 久孝

論文審査の結果の要旨

自宅で介護をする介護者の筋骨格系に関わる健康問題は、在宅介護の重要性が増している高齢社会で重要な健康課題である。しかし、これまで施設の介護職員の筋骨格系症状と介護行為との関連を調査した研究が多く、在宅介護者の筋骨格系症状と介護行為との関連を詳細に調査した報告はみられない。そこで、本研究では、女性家族介護者 156 名を対象に、介護者が訴える頻度が高い「腰痛」と「首肩背中のこりと痛み」に着目して、それらの症状の程度と日常生活活動との関連、さらに各症状と関連する介護行為について検討し明らかにした。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 女性家族介護者において、「腰痛」や「首肩背中のこりと痛み」の頻度が高いほど日常生活活動が制限されていた。
2. 両症状には、複数の特有の介護行為が関連していた。腰痛には、「問題行動への対処行為」（本調査の問題行動への対処行為とは、認知症に起因して起こる症状により、介護者が介護することが困難と感じる行為への対処とした。）「体位交換に関する介護行為」「主に静止姿勢で行う介護行為」が関連していた。一方、首肩背中のこりと痛みには、介護関連要因として「夜間介護」「問題行動への対処行為」「全体的に力のいる介護行為」「主に前傾・中腰で行う介護行為」「主に静止姿勢で行う介護行為」「介護行為総数」が関連していた。
3. 本研究で最も興味深い結果は、問題行動への対処が両症状との間に強い関連を示したことである。先行文献には、問題行動と腰痛や首肩背中のこりと痛みの関連を指摘したものはない。この結果は、家族介護者の「腰痛」「首肩背中のこりと痛み」の予防、軽減対策を考える場合に、認知症関連行為への配慮の必要性という新たな視点を提示するものである。

本研究は、在宅女性介護者の「腰痛」「首肩背中のこりと痛み」などの筋骨格系症状の軽減を図る場合に、生活習慣の改善や介護技術の指導と共に、認知症に起因して起こる行為への対処にも支援の必要性が有ることを指摘した点で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するために相応しい価値を有するものと評価した。